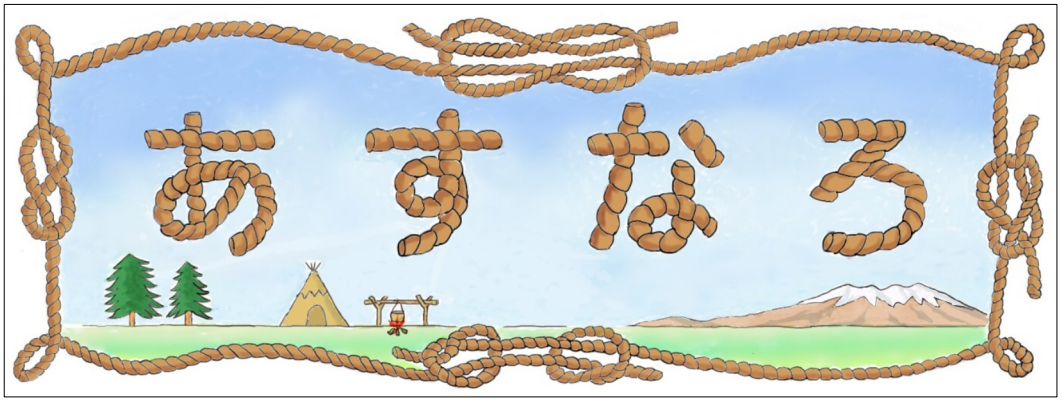


ボーイスカウト東京連盟
あすなろ地区広報誌
第６号

2015年9月30日
組織拡充委員会

**世界ジャンボリー
特集号　その２**

第23回世界スカウトジャンボリーに参加されたスカウト、リーダーやＩＳＴとして参加された皆さん、またホームステイ受入家庭の皆さんの活動状況、感想などを特集しました。

ジャンボリー会場は まるで外国！　　参加スカウトの感想

0307隊 白虎（ビャッコ）班班長　杉並５団 ベンチャースカウト　　稲川 拓海

日本で開催された今回の世界ジャンボリーですが、キャンプサイトの周辺は外国隊で、道を歩いているのも海外スカウトが多く、まるで外国に来たような感覚になりました。一つひとつのプログラムも興味を引かれる内容ばかりで、用意された時間だけでは足りないくらいでした。

その中でも、ＧＤＶ（Global Development Village）で体験したプログラムが印象に残りました。体や頭を使ったゲームを通して、エネルギーの重要性を学ぶものでしたが、班員とも協力しながら参加できました。プログラム終了後は担当の海外スカウトと30分ほど会話をすることができました。

世界ジャンボリーが日本で開催されて、自分が参加できたことはラッキーでした。この経験をこれからのスカウト活動に活かしていきたいと思います。

0307隊 大山猫（オオヤマネコ）班　中野７団 ベンチャースカウト　　本　和陽

今回の世界ジャンボリーで、平和や命の大切さ、笑うことの大切さを学んだ気がします。スカウトは平和を世界に届けるメッセンジャーであって、さまざまなスカウトとの交流をした僕達だからこそ、伝えられることがたくさんあると思います。国や人種、言語、宗教が違っても、笑いだけは共有できると思います。

ジャンボリーの参加によって、多くの国のことを学んだり、言葉の通じない相手にどのように考えを伝えるかを学ぶことができました。一番強く思ったのは、人は皆同じで、それぞれ個性を持っているからおもしろく、個人が集団になったときに新しい発見が生まれるのだと思いました。

0307隊 大山猫（オオヤマネコ）班　杉並３団 ベンチャースカウト　　石原 滉士

今回のジャンボリーではさまざまな国の外国スカウトと交流することができました。特にメキシコとはなにかと一緒になることが多く、一番多く話すことになりました。英語がうまく話せない同士、ジェスチャーで頑張って伝えようとする力は身についたのかもしれません。

遠い国の知らない人なのに、通りですれ違うだけで「Hello!!」の言葉が行き交うのも、ジャンボリーでしか経験できないことでした。

キャンプサイトの目の前にハブテントがあり、ＩＳＴの方々のサポートを目のあたりにしてきましたが、自分も次回の日本ジャンボリー、世界ジャンボリーには、“あちら側”から参加できるように頑張って活動していきたいと思います。

0307隊　鼯鼠班（ムササビ）　　杉並４団 ボーイスカウト　　岸田 颯太

世界ジャンボリーに行って、本当に良かったと思うことが３つあります。

一つめは世界ジャンボリーがどういう所で、どのような事をするのかを知ることができたことです。世界ジャンボリーに行って、見て、いろいろな貴重な経験をすることができました。

二つめは外国の人と触れあえた事です。普段の生活では、外国人を見ても、なかなか話すことができませんが、ジャンボリーでは外国人がたくさんいて、話さなければならない状況もあり、英語で話すことができました。

三つめは、仲間と２週間、協力して過ごせたことで、ご飯を作ったり、トランプをしたり、プログラムを受けたり、どれも仲間なしでは過ごせませんでした。

改めて、人とのつながりの大切さが実感でき、いい体験ができたジャンボリーでした。

0307隊　鼯鼠班（ムササビ）　　杉並４団 ボーイスカウト　　都筑 瞭佑

僕が今回の世界スカウトジャンボリーで学んだことは、外国と日本の文化の「違うこと」と、「同じこと」です。

「違うこと」は、積極さです。開会式や閉会式などで外国の人たちがダンスをしたり、声を出したりしてとても迫力があり、積極的ですごいと思いました。

「同じこと」は、世界中の人達が、同じ歌や曲やダンスで盛り上がれるということです。人種や言葉が違っていても、楽しいものは誰でも楽しいのだと思いました。

このことから、世界中の人びとはみな違っているからこそ、他の国を尊重でき、知ることができます。今回の１２泊１３日のジャンボリーの経験を生かして、外国の人に会う機会があれば積極的に声をかけ、相手の文化を知っていきたいと思います。

今回のジャンボリー参加のために、たくさんの支援をしてくれた関係者の皆様、本当にありがとうございました。

0307隊 鼯鼠班次長（ムササビ）　杉並１３団 ベンチャースカウト　　室賀 来知

この夏、１２泊１３日のジャンボリーの期間中、世界中のスカウトが会場の“きらら浜”で一同に会して、日本の地でありながら日本でない、「スカウトの国」が築きあげられました。そこでの経験は何もかもが新鮮で、魅力的で、面白かったといえます。

そして醍醐味ともいえる海外スカウトとのコミュニケーションについては、自分の限られた英語能力で話す方法を模索し、なんとかたくさんのスカウトとの交流ができました。

たとえ、言語の壁があろうとも、思いを伝えたいという望みさえあれば、ある程度はなんとかなります。言葉の通じない相手とのコミュニケーションで一番大事なのは、言葉の上手、下手ではなく、「相手に意志を伝える意志」であるということで、このことを知ることができたことが、今回のジャンボリーの一番の収穫となりました。日本人はやはり相手に意志を伝える意志が弱いと思います。

私はメキシコの同年代のスカウトと話したとき、「僕が会った日本人はみな逃げるか、まともに話してくれないかだったよ。君ほど英語を喋る日本人には会っていない」と言われました。しかし私は中学２年レベルの文法と、単語しか使っていませんでした。

私のジャンボリー唯一の不安は、外国スカウトが日本にマイナスイメージを持たなかったかということです。しかしそれがあろうとも、ジャンボリーの参加は一生忘れぬ楽しい思い出となりました。

This is your Jamboree”　　参加リーダの感想

将来展望に繋げられる大会　　0307隊隊長　杉並１２団 ベンチャー隊長　飯沼 利雄

はじめに、世界スカウトジャンボリーより全員無事に帰着したことを皆様にご報告いたします。

本大会は８０％が外国からの参加者で、ウェルカムセンターに到着してから、「ここは日本？」と思わせるくらい、各国のＩＳＴのみなさんの出迎えを頂き、派遣隊スカウトだけでなく、指導者もテンションが高くなったことを今でも思い出します。今回の大会の参加者は、世界１５２の国と地域から約３万３８３８人、デイビジター（日帰り参観者）は延１万１１４２人にのぼりました。

大会のテーマは「和（Wa）：a Spirit of Unity」で、調和、平和、ハーモニー、協調性を意味します。本大会でとても印象的であったことは、終戦７０年の節目の年、世界１５２の２万６０００人を超す派遣隊のスカウト、指導者

が会場から広島を訪れ、平和記念公園、原爆資料館を訪問し、原爆の悲惨さや平和の尊さを学ぶ「広島ピース」プログラムが実施されたことです。広島の平和式典には１００ヵ国とＥＵの代表のほか、１５１ヵ国の代表スカウトが千羽鶴を持参して大会会場から参列し、過去最多の国籍の人々が参列した式典となったことです。

また、長崎の「世界こども平和会議」にも１４１カ国の代表スカウトが参加し、こうした体験により各国の参加者一人ひとりがこれからの世界平和について考えること、話し合うこと、伝えていくことが平和を維持する大きな一歩だと認識し合えたことは、参加者全員にとって有意義な体験ができた、印象的なプログラムとなりました。

世界ジャンボリーは、スケールの大きさ、参加人数、言葉、習慣、宗教等、様々な点で国よって異なるため、スカウト及び指導者にとって、参加出来ることはとても刺激的で、将来に向けての展望に繋げられる大会だと思います。

振り返ると日々猛暑の中での１３日間に及ぶ長いキャンプでしたが、仲間同士の気遣いと友情があるからこそ、乗り越えられてきたのだと思います。また、ホスト国としての意識をみんなが持ち、出来る限り外国隊に協力し、支援しようと心がけている様子が感じ取れ、嬉しく思えました。みんな本当にお疲れ様でした。

世田谷・あすなろ地区派遣隊隊旗と寄せ書き

隊長としてスカウトたちに思うことは、今回参加した仲間は一生の友であること、そしてお互いを認めあい、助け合う仲間であること、同じ目的を持った世界の仲間たちが日々スカウティングを行っていることを忘れず、これからの活動の糧にしてもらいことです。そして、大会に参加し、無事に帰着出来たことは、指導者、実行委員、関係者皆様のご協力の賜物と感謝します。ありがとうございました。

「イッツ・ア・スモールワールド」　0307隊副長　杉並１２団 ボーイ隊長　小平 吉彦

せっかくボーイスカウト活動に関わったのだから、そしてこれが最初で最後の機会であろうから、「世界ジャンボリーを体験してみたい…」と、半分は酔っ払った勢いで話したのが昨年の６月のことでした。日本ジャンボリーすら参加した経験が無く、ジャンボリーそのものがいかなるものかも、正確に理解していたとは言い難い状態でありながら、です。

それから改めて考え直してみる間も無く、参加申込書を書き、続いて実行委員会も始まって、回数を重ねていきました。まだ先のことと少々気楽に考えているうちに、年が替わり、隊集会、訓練キャンプと続き、とんでもないところに足を踏み入れようとしているのではないか…、といささかプレッシャーも感じるようになってきました。

実際に世界ジャンボリーが始まってみると、キャンプ生活と、プログラムをこなすという「現実」と、その合間に会場内を歩いて、これはまるでディズニーランドのアトラクション「イッツ・ア・スモールワールド」ではないか、と思う「夢」さながらの気分とが交差するかのような日々でした。

その中でとりわけ印象に残ったのが、イスラム教徒のスカウトが着用していたＴシャツです。いまもなお、世界の各地では紛争が絶えません。その中で、最も報道される機会の多い紛争の一つが、「イスラム国」を名乗る「IS」に関連するものと言えるのではないでしょうか。この組織のために、一般のイスラム教徒までが偏見の目で見られてしまっている、という報道も耳にします。「I am a Muslim.　I am a scout.」と背中に大きく書かれたそのＴシャツからは、私たちはイスラム教徒であると同時に、宗教、民族、国籍などを超えて理解し合い、共通の行動と目的を持つスカウトでもある、との強い思いが放たれていたように感じています。

参加スカウトたちは、リーダーが感心するくらいに、実に積極的に外国隊との交流を図っていました。多くの国のスカウトが同じ場所で暮らしている中で、様々なプログラムでの交流を通じて、多くのことを学び、多くのことを感じてもらえたと思っています。そのたくさんの得たものの中の、最も大きなものの一つは、人種、民族、国籍、宗教などを異にしていても、相互理解は可能であり、平和に共存できる世界の実現は、けっして夢ではない、という思いを持てたことにあるのではないでしょうか。

最後に、世界ジャンボリー参加にあたり、地区の皆さんから多くの支援とサポートをいただいたことに、心より感謝します。そして、やはりジャンボリーの主役はスカウトであり、ジャンボリーで得てきたものを少しでも今後の活動に活かし、地区のスカウトため、また次回世界ジャンボリー参加への一助になればと思っています。

兄弟と呼べるつながり　　0307隊副長　杉並１３団 ボーイ隊副長　小原　翔

私の２４年と数ヶ月の中で、最も長く、最も短く、最も濃密な、そんな不思議な１３日間が幕を閉じました。この時間は、とても言葉では言い表しがたいものでした。それはまるで、分厚い本を読み終えたような。きらら浜という場所で巻き起こった物語です。

私にとっては、初めての世界ジャンボリーでした。終わってしまえば、始まった理由は覚えていないというのが世の常なのでしょうが、私自身もなんで参加にするに至ったのか、今でもピンときていないのが正直なところです。２年前のプレ大会、第１６回の日本ジャンボリーの閉会式で、今回の世界ジャンボリーのプロモーションビデオを見た時、自分自身が参加することは想像もしていませんでした。

しかし、今では参加しなかった自分が想像できないほど、これからの人生に大きな影響を及ぼす経験になりました。その経験の中でも重要なものになったのが二つあります。

そのひとつが世界のスカウトと会えたことです。当然のことのように聞こえますが、スカウティングが子どもたちにとって必要なことだと信じ、奉仕をするリーダーとして、そしてこの運動に参加し続けている一人のスカウトとして、ボーイスカウトが世界中にいること、子供たちのために汗をかいている大人たちがいること、それは圧倒的な経験でした。それは、私自身にとって勇気になり、安心になり、大きな刺激にもなりました。

もうひとつが、全世界１５０余の国の３万人を超える多数のスカウトと１３日間を過ごした体験です。まわりを見渡せば外国人、口を開けば外国語という環境でしたが、そこに国境の壁はなく、肌の色や男女、宗教の壁もありませんでした。すれ違う度に挨拶を交わし、困ったら相談しあって、何かあれば助けに行って、何より笑顔が絶えることがありません。しかし、自分たちの国の文化に誇りを持ち、自分が自分であることに誇りを持ち、信仰する宗教に誇りを持ち、お互いにしっかりと主張し、尊重し合っています。私はこの経験を通して、「どこの誰である以前に、スカウトであり兄弟である」ことの本当の意味が分かった気がします。

少なくともこの場においては、 文化や宗教は「区切り」ではなく「誇り」であり、「隔たり」ではないこと。我々には兄弟と呼べる「つながり」があること。それを心に焼きつけた全世界のスカウトが、この世界を平和な世界に、この社会をより良い社会にしてくれることを期待してやみません。

私はこれからの長い人生の中で、この物語を幾度となく読み返すでしょう。そして物語を、より多くの子どもたちに読んでほしいと思います。

最後に、開会式で心打たれた言葉を添えて…“This is your Jamboree”

成功への思いが一体感に　　0306隊副長　　中野８団 ベンチャー隊副長　清田義隆

２３ＷＳＪから1ヶ月以上過ぎ、とうとう夏が終わろうとしています。寂しくもありますが、今はジャンボリーに参加出来た喜びと、ご支援下さった皆様へ感謝の思いでいっぱいです。

現地のキャンプサイトでは、各国の派遣隊それぞれ創意工夫を凝らしながら野営を行っておりました。国旗を揚げる掲揚柱、サイトの目印となるゲート、寝泊まりするテント等、どれも各国の文化が反映されたものであり、独創的な空間を生み出そうと、スカウト達は懸命に取り組んでおりました。

また同じスカウトの仲間として交流を深め、協力して大会を成功させようという一人ひとりの思いが、一体感を生み出します。それは開会式で行った全スカウトによる「ちかいとおきて」の唱和や、公共場所の清掃活動など、随所で見る事が出来ました。中でも印象的でしたのは、近くの派遣隊がセレモニーを行う際、周りのスカウト達は一時作業を中止して、その場でセレモニーの行方を見守るという一連の流れを、期間中欠かさず行った事でした。

広島ピースプログラムで、被爆された方々の詩を朗読した後、あるスカウトが発表した「私達はきらら浜で平和な空間を築きあげる事が出来ている。今こそ私達の手で世界に向けて平和を発信しよう」というメッセージには、今回のジャンボリーをきっかけに、活躍の場を広げたいという強い意欲が伝わりました。

あすなろ・世田谷地区派遣隊のスカウト達も例外ではありません。４月の結隊式から事前訓練を重ねて大会に参加しました。しかし、予定の空港に着陸出来ず、大幅に遅れて会場に到着した事や、連日の猛暑で、序盤から体調不良者が続出するアクシデントに見舞われてしまいました。そのような環境の中でも、上級班長・班長・次長を中心として知恵を出し合い、より良い隊運営を考えていました。日数が経つにつれて隊としてまとまり、プログラムの合間に自分達で交歓会の相手を探し出して、キャンプファイヤや食事会を企画し、世界ジャンボリーを全力で楽しもうと変

化していきました。派遣隊指導者として彼らの成長を間近で見る事が出来てとても貴重な経験をさせて頂いたと実感しています。

最後に、２年前の日本ジャンボリーに続き、今回の世界ジャンボリーに派遣隊副長として参加できたことを、心より感謝します。

０３０６と０３０７隊のスカウトのみなさん、お元気で。さらに成長した君達に再び会える日を楽しみにしています。

ＩＳＴ（International Service Team）で支援の皆さん

食材配給の役務を担当　　杉並３団 ボーイ隊副長　　内田 朋子

2015年、今年の夏は暑かった！！

日本で４０数年ぶりに世界ジャンボリーが開催される。今後自分が生きているうちに、日本で開催される可能性はかなり低そうだ。しかし、２週間近くも仕事を休むことはできない。そんなときに日本連盟から３次募集ということで、５泊６日の部分参加の募集が出た。ＩＳＴの参加者が少ないのか？この日程ならなんとか行けそうだ、せっかく始めたスカウティング、世界を見てみたい！

後半での参加を希望したので、配属はハードと言われている「Food and Trading」。簡単な説明を受けた後、すぐにWESTERN Hubへ移動。遠い！　炎天下のなか、黙々と歩く。とにかく会場は広いのである。Hubに着くと、日本人と海外のＩＳＴが半々くらい。簡単な自己紹介を…とのことで、つたない英語にて自己紹介をすると、意外にも海外の方から大きな拍手をいただき、テンションが上がる。

仕事は、早朝2：00（いつもなら、寝る時間だろうか）に起床し、ヘッドライトをつけ、2：30までにHubに向かう。コンテナトラックが到着し、荷卸し・配給のための食材を並べる。夜明け間近に、各国のスカウトが配給に並び始める。宗教上の戒律や信条等から、肉、魚、玉子、乳製品等が制約されるハラール用・ベジタリアン用・コーシャ用・ビーガン用と特別食を分け、再度の点検をすませるころには汗ばむ気温となってくる。そしてスカウトへの配給開始。

朝は朝食・昼食分の配給のため、かなりの重さの食材を手分けして運ぶスカウトたち。山のように積まれていた食材は、あっという間になくなっていき、圧巻である。そして7：30くらいに後片付けを終え、午前の業務が終わる。

午後の14：30までにHubに向かい、朝と同じように、夕食のための配給準備が始まる。そして19:30頃に一日の仕事が終わる。長期の参加の方は、２班に分かれて一日おきの奉仕のようだが、短期の私は全日奉仕をすることとした。

しかし、連日の真夏日のうえにハードな肉体労働と、なれない英語の生活にストレスは増すばかり。ふだんなら、もう一度考える場面でも、つい言葉が出てしまう。すると、海外の方たちからの反応が俄然よくなるではないか。単語の羅列なのだが、「そんなことがわからないで悩んでいたのか？　それならこういう手もあるよ」、とアドバイスをくれる。受け身ではなく、自分から積極的に話すことで、お互いの距離が縮まるってこういうことなんだ、と驚く。

混み合うHubでの配給の作業

今回、一番大事な「食」にかかわるＩＳＴ奉仕に参加して、いかに自分が何も知らないのかを改めて知った。日本にいると基準が平面的となってしまうが、世界は広く、そして多重構造である。自分で考え、自分で話し、そして行動する。あたり前のことだが、いかにそのあたり前が大切かを痛感した。

初めてのジャンボリーへの奉仕は、自分を見つめ直す最高の機会となった。そして、この経験を自隊での活動に活かしてこそ、と強く感じる夏となった。

参加するまでには隊・団・地区等のたくさんの方々のご協力があった。深く感謝したい！　ありがとうございました。

中央救護所で傷病者の看護　　あすなろ地区　杉並第２団　石井友紀

世界ジャンボリーにはＩＳＴとして参加し、セイフティー部の中央救護所に配属され、主に傷病者の看護及び血液検査を担当していました。中央救護所には、医師・看護師・薬剤師・歯科医・クラーク・救命救急士など、多職種のスタッフで構成され、点滴・縫合・巻爪処置などを行っていました。また、期間後半は往診用の歯科診療車も登場し、それはもうちょっとした町の総合病院のようでした。

ジャンボリー参加者約33,000人のうち、熱中症・日焼けによるやけどや、その他傷病者で診療所は約3,500人が利用しました。日本の法律で「診察・処置は日本のライセンス所持者のみ許可する」とされていて、日本人スタッフは大

忙しでした。

検査ブースは、外国ＩＳＴが担当していた「ジャンボリー119」のコールセンター内の一角にあって、常に英語が飛び交っており、外国ＩＳＴの熱気やテンションの高さに圧倒され、非日常の環境に慣れるまでは時間を要しました。

コールセンターで受けた通報で緊急対応が必要な場合には、台湾・香港の救命救急チームが自衛隊の搬送車で傷病者をPick upに向かう流れになっていました。外国ＩＳＴの中には日本語が苦手な方も多いため、コールセンターにかかった電話の相手が日本語の時には、「Japanese Please！」と呼ばれることも多くありました。

ある日、コールセンター付近の日本人スタッフが私だけの時に、「Japanese Please！」と呼ばれ、「あぁ、日本人スタッフを探しに行かなければ…」とコールセンターを出ようとして、「You Japanese！」と呼び止められるなどの恥ずかしいハプニングもありました。

中央救護所で診察・処置をする日本人スタッフは、日本連盟医療チーム員を中心に構成され、ほとんどが日本ジャンボリーで一緒に奉仕したメンバーのため、スタッフ間のコミュニケーションは大変良好でした。

休憩時間には自衛隊医師からミリタリー食の差入れをいただいたり、また巨大なたこ焼き器を用いてケーキを焼いたり、ささやかなバースデイパーティーも楽しみました。日本の伝統食品として、ところてんや冷やし甘酒(もちろんノンアルコールです)を外国ＩＳＴにふるまうなど、中央救護所内では外国人スタッフとの交流もしていました。

印象に残っていることとして、中央救護所がサイト近くのため、毎朝行われていたチェコ隊のパレードなどを見ることができ、スタッフ食堂では、「今日は自分の誕生日！みんな自分に歌をプレゼントして！」とボードに書いて歩く人が毎日のようにいて、至る所で歌と拍手が湧き上がるなど、日本では見られない光景の連続でした。

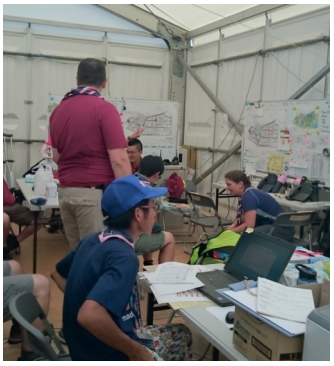
怪我をして歩けなくなったスカウトの仲間が、自分たちで工夫して車いすを作り、中央救護所まで連れてきたこともありました。

エピソードの一つとしてこんなことがありました。ほとんどの救護所スタッフは業務上、開会式・閉会式・大集会などのイベントに参加はできません。閉会式前に発熱して、閉会式に出られないと相当落ち込んでいたスカウトに「閉会式が終わるまで熱を測るな。救護所に来るなら閉会式後に来い！」と多めに解熱剤を渡すなど、怪我や病気をしたスカウト達がジャンボリーを少しでも楽しめるように、スタッフ一丸となって対応していました。

閉会式も終わり、それぞれスカウト達がきらら浜を後にし始めると、傷病者であふれていた救護所も静けさを取り戻し、最後の傷病者だった外国スカウトが原隊に戻ると、クローズの準備と、早くも次の日本ジャンボリーの準備に取り掛かり、残ったスタッフ全員で片付け後に恒例の連盟歌を合唱し、救護所業務は無事に終了しました。

最後に、杉並２団や、あすなろ地区など、多くの皆様の支援があったからこそ、私はＩＳＴとして参加でき、有意義で貴重な経験をさせていただきました。皆様には感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

中央救護所の日本スタッフ
（筆者後列右端）



外国スタッフ担当の
コールセンター

ポーランドのスカウトを迎えたホームステイの家庭では…

８月９日、世界ジャンボリーに参加後のポーランドのスカウト、リーダー５０名は、東京駅に到着し、あすなろ地区各団の３３家庭で１１日までホームステイしました。

それぞれの家庭でのホームステイの様子をお伝えします。

東京駅に到着したポーランドのスカウト

翻訳アプリが活躍！　　中野７団　　本 奈美子

我が家には、中野７団に１８歳の娘と１６歳の息子がいます。

特に娘は、初めて参加した15回日本ジャンボリー以来、異年齢・他地区・他国のスカウトとの交流に好奇心を持っていました。

そして、今回の世界ジャンボリーでは海外スカウトとの交流を何よりも楽しみにしていましたから、ホストファミリー募集の話があった時に、私たち家族は迷わず受け入れを決め、２泊３日を楽しむことにしました。

ところが、受入れを決めてから数ヶ月後、子ども達の様々な予定がわかってきたと同時に、不安が募ってきました。なぜなら、ホームステイ初日以外、子ども達は学校と夏期講習のために日中不在の時間が多く、昼間の大半を英語力のない私が対応をしなくてはならないことがわかってきたからです。楽しみにしていたはずの２泊３日が、私の中で徐々に不安へと変わっていきました。

「普段通りの生活で構いません」と言われていたので、大丈夫だろうと考えるようにしても、やはり私以外の家族が留守の間は私とスカウトのみで、食事時も寂しい…。英語によるコミュニケーションが取れない…。そんな思いを、知り合いや団の人に相談しながらスカウトを迎える準備をしていきました。

そして８月９日から１１日の３日間、ポーランドのスカウトを受け入れました。当初、女性指導者１名を受け入れる予定が、急遽スカウト男女１名ずつ２名の受け入れに変更になりましたが、これも娘と息子がいる我が家ならではの〝ご縁〟だったのでしょう。

親の心配と不安をよそに、子ども達は昼間一緒に過ごせなくても、毎晩、部屋でなにやら見せ合ったり、それぞれの学校の先生の話をしたりして、盛り上がっていました。私はというと、思ったことが上手に表現できずに、翻訳アプリに頼りっきりの毎日で、情けないと思いながらも、今の時代の便利なアプリに助けられました。

また、地域の方のご厚意で浴衣と甚平をお借りして、阿佐ヶ谷の七夕まつりに行ったり、東京観光をしたり、自団の同世代のスカウトを招待して、各家庭の料理を持ち寄った夕食会をしました。夕食会の時には我が家の子ども達がいなかったにも関わらず、大成功！年齢が近い者同士、コミュニケーションが取りやすかったようで、笑いが絶えない、楽しいひと時を過ごす事ができました。世界ジャンボリーに参加しなかったスカウトも、国際交流の機会を持つことができて好評でした。

不安で一杯だった私にとっては“長い３日間”でしたが、子ども達にとっては“あっという間の３日間”でした。

娘は今まで以上に海外への興味を持ち、息子はコミュニケーション力に少し自信を持つことができました。勿論初めてのことでしたので、反省や後悔することもありましたが、貴重な体験をさせていただきました。このような機会を与えていただけたことに感謝しています。そして、子ども達は今回の経験を生かせる場面がきっとあると信じ、常に新たなことにチャレンジし続けてもらいたいと思います。

いろいろな日本、いろいろなおもてなし　　杉並１２団　河井苑子

東京駅にポーランドスカウトを迎えに行ったのは、猛暑の谷間の８月９日。用意したネームボードを見て近づいてきたのは、中学生と高校生の女子スカウト二人。最初は戸惑いながらもなんとか言葉を交わし、今思い出しても密度の濃い三日間でした。

初日は家に案内し、一息ついて夕方、阿佐ヶ谷は七夕祭りの最終日で、日曜日で賑わう中を案内しました。その人混みには驚いた様子でしたが、翌日すっかり片付けられているのにも感心していました。

二日目は、あすなろ地区主催の都内ツアーとは別行動をとり、まずは日本橋近くの和紙専門店の小津和紙へ。洋紙と和紙の違いなどを説明していただき、実際に紙漉き体験。自分で漉いた紙を包んでもらった後は、お土産になるような美しい和紙製品をじっくりと吟味していました。

続いて浅草、浅草寺へ。「犬も歩けばスカウトに当たる」というほど、各国のスカウトが集まっていました。女性

の買物好きは万国共通のようで、仲見世通りでは草履や扇子、いろいろな品を手にとり、じっくりと選んでいました。
そして、明治神宮へ。その広大さ、木々の高さ、鳥居の高さには圧倒された様子で、下町の雰囲気とは対照的なひとときを過ごしました。
その日の夜は、１２団の歓迎行事で区内施設へ。団の大勢の方々が午後中かけて、手作りの天婦羅や炊き込みご飯、ポテトサラダなどが用意されました。ホームステイ家庭としては、欧米によくあるホームパーティーで「おもてなし」をするのは叶わないと思っていましたので、こうした場を設けていただいたのは大変ありがたく思いました。
さて、あっという間の最終日。集合時刻が早いので、比較的近いところで新宿の都庁展望台に行きました。その眺望には歓声をあげていました。もっとも、景色を眺めていたのと同じくらい長い時間、土産物売り場でまたまたショッピング。女子中高生らしい微笑ましい姿でした。
今回のポーランドスカウトの受入れは、言うまでもなく国際交流のよい機会でしたが、同時に同じ受入家庭同志、事前の不安や、無事に送り出した後の充実感を共有できたことも、得難い機会でした。１２団でホームステイを受入れた他の２家庭の感想をまとめて、以下にご紹介したいと思います。

「スカウトの誇り」。長いジャンボリーの後、相当疲労がたまっていたに違いありません。それでも活動的に貪欲に東京滞在を楽しんでいたのは、若さだけではなく、スカウトであるからには、だらしないところは見せてはならないという誇りのようなものがあったのではないでしょうか。我が身、我が子を振り返り、頭を垂れる思いでした。
「いろいろな日本、いろいろなおもてなし」。一緒に「となりのトトロ」のＤＶＤを英語で観た家庭もあれば、ポーランドでも人気の日本のアニメ「ＮＡＲＵＴＯ」など、夜通しアニメ談義を展開した家庭も。
「神社と寺とを見比べたい」という勉強熱心なスカウトの質問攻めにタジタジとなったり、「なぜ姿見にきれいな布をかけておくのか」という素朴な質問に図解で説明したり。当たり前に思う自分の国の文化について、いろいろ気づかされた三日間でした。
「観光名所vs地元」。仲見世や原宿も人気でしたが、百円ショップやコンビニ、モスバーガーなど、私たちの日常のものにも喜んでくれました。そして、阿佐ヶ谷パールセンターの民芸品「ねじめ正一商店」は、ホームステイの各家庭でも大人気で、身の回りの「日本らしさ」を再発見した思いです。
最後に、「ホームステイ家庭だけで独占するのはもったいない」。今回１２団ではたまたま近い世代のスカウトが不在の受入家庭が多かったのです。もちろん大人にとっても、またとない経験でしたが、スカウト世代にこそ体験して欲しい貴重な機会だった、というのが共通の感想でした。日本語が通じなくても、物怖じせずにコミュニケーションをとる機会を重ねることで、国際的な感覚も育っていくのだと思います。
もし同じような機会かあれば、今度はいろいろな形で同世代のスカウトが交流を深められるよう、微力ながら協力できればと思っております。
得難い機会をいただき、ありがとうございました。

紙漉きを体験

団の歓迎会で浴衣を着用

食文化の違いを実感　　杉並４団　長谷川 礼以

ポーランド語はもとより、英語もおぼつかない我が家で、大胆にもホームスティ受入れることに。その日が近づくにつれて、いつもはクールな長男も、何やらソワソワ、家族も何となくハイに。
受入れ当日、東京駅で待つ間、どんな子が来るのだろうか、いやが上にも高まる期待。
到着したポーランド隊の皆さんは、背が高く大きくて、我が家のお風呂に入れるか、布団からはみ出さないか、心配になるぐらい。
ウェルカムボードを高々と上げていると、はにかみながらやってきたのは、意外と小柄な１６歳の男子高校生のヒューバート君。他の受入れ家族とともに、車で我が家へ向かっている車中では、友人同士結構おしゃべりをしていました

が、一人になるとさすがにお互いに緊張し、たどたどしい英語と、スマホの翻訳アプリで何とか間を持たせて我が家へ到着。ホームスティ中は、スマホの翻訳アプリと電子辞書にはずいぶん助けられました。

玄関では靴のまま上がろうとしたので、さっそく文化の違いを実感。しかし布団はきちんと畳んであったし、少し遠慮深く、礼儀正しい子でした。

２泊３日の短期間で、一番印象的だったのは食事で、初日の夕食にワカメの味噌汁を出すと、「何これ？食べられるの…」と顔いっぱいに不安がありあり。においをかいだ後に恐る恐る口にして「ごめんなさい。食べられません」いいの、いいの、あなたの国では多分食べないよね、ワカメ。

肉は当然問題がなく、天丼もイカは食べにくそうだったが、おいしそうに完食。全然ダメだったのは生魚。ワルシャワにも日本食レストランはあるそうで、回転寿司へ行くと、なかなか彼の手が出なくて、適当に選んで勧めてみた。

カッパや唐揚げは問題なかったが、白身やマグロは恐る恐る匂いを嗅いでから口へ入れるものの複雑な表情で、タコは見ただけで想像通り「ＮＯ！」。日常では生魚を食べることは全くないとのことで後悔しましたが、鮭のおにぎりはおいしそうに食べていました。

意外だったのは抹茶と和菓子で、おいしそうに飲んで、食べていましたし、お菓子も好きで、コーラとスコーン（それも和風バーベキュー味）がお気に入りでした。

ポーランドでもＳＮＳが盛んとのことで、早速Facebookで友達登録をして、撮った写真をお互いにアップしましたが、コメントがポーランド語なので残念。

事前に本人の希望や興味がわからなかったことで、少し詰め込み過ぎのミスマッチなイベントを組んでしまった気がします。２泊３日の限られた期間のため、事前に本人の興味のある事柄や、希望を知ることができれば、日本の家庭の体験や交流がより深まったと思います。

家族にとって貴重な体験となったことに感謝します！

８年後のポーランド世界ジャンボリーが楽しみ　　杉並４団　村越 絵美子

ポーランドスカウトを迎えるにあたり、子供たち（８歳、４歳）と観光コースやお土産などを決めて、楽しみにしていましたが、英語は通じるか、どんな料理が口に合うかなどの不安も抱えつつ、東京駅に迎えに行きました。

会ってみると、１４歳のマクシミリアン君は素直で、フレンドリーな男の子でした。新幹線での移動の直後で空腹だと思い、早速何か食べに行こうと誘うと、彼は「日本の食事は怖い…」と言うので、マクドナルドへ。彼は世界ジャンボリーや広島観光の写真を見せてくれて盛り上がり、片言の英語ながら、気負わずに過ごすきっかけになりました。

その後も彼は、こちらが想像していたほどには日本食に興味がなく、唯一唐揚げが気に入ったくらいで、日頃食べ慣れた物が一番良いようでした。そこで料理を出す事は諦めて、外出先でお店を探す事にしました。

帰宅後は、阿佐ヶ谷の七夕祭りへ行き、数多くの飾りを眺めながら、出会ったスカウト仲間と写真を撮ったり、子供達とかき氷を食べたりと楽しんでいました。

一日中フリーになる２日目は予定を組み、朝から上野動物園の後、スカイツリーからお台場に向かいました。

スカイツリーは喜んでくれると思っていたのですが、予想に反してインパクトはなかったようで、早々に引きあげてお台場に向かいました。彼の希望通り自由の女神像の前で写真を撮り、広場で子供たちと走り回って遊びました。

夕食にイタリアンレストランに入ると、もりもりと食べていました。一日一緒に行動してみて、ようやく子供連も彼になつき始め、また私たちにも彼の好みなどが分かって来ただけに、翌日のお別れが少し残念でした。

彼は東京タワーに行きたかったのを言えずにいたようで、帰りに見えた東京タワーの写真を撮っていました。とても名残惜しそうだったので、夜９時を過ぎていましたが、今日しかないから行こうかと言うと、彼も子供達も大賛成で、最後に東京タワーに上ると、彼は大変喜んで記念メダルを作って帰りました。

３日目は帰りの出発まで自宅で過ごし、グーグルマップでポーランドの自宅を見せてもらいました。８年後の世界ジャンボリーにポーランドが候補になっているらしく、開催予定地もマップで教えてもらいました。それを見た長男は、８年後の世界ジャンボリーに行くと、張り切っていました。

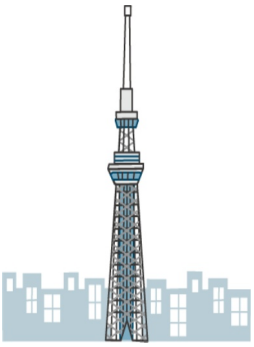
あっという間の３日間でした。集合場所からバスに乗り、見えなくなるまで一生懸命手を振っていた彼の嬉しそうな姿をみて、お互い英語は得意ではなかったけれど、気持ちは十分伝わり、彼も楽しんでくれたのを実感出来ました。

素晴らしい出会いと経験になった事に感謝すると共に、また彼に再会できる日を楽しみにしたいと思います。

息子が増えた気分　　杉並１１団　吉無田 真如

わが家にはポーランドの男子スカウト２人が８月９日から３日間、ホームステイに来ました。１６歳のピーターと１５歳のルーカスです。９歳の息子と６歳の娘にとって、外国人と長い時間を過ごすのは初めての経験でした。英語が話せなくても、指相撲をしたり、ウノをしたりしながら交流を楽しんだようです。

初日は東京駅まで迎えに行きました。事前に２人の名前を書いたウェルカムボードを作りました。折り紙の鶴やポケモンを貼り付け、カラフルに仕上げました。子供たちはボードを作っているうちに気分が盛り上がったようでした。娘の浴衣姿は、ポーランド団の方々に喜んでいただけました。



終日予定が自由だった２日目は、ピーターとルーカスのリクエストで東京スカイツリーに行きました。ツリー内の商業施設「東京ソラマチ」は、雑貨店や飲食店が充実していました。ピーターとルーカスはお土産に箸や紅茶を買っていました。その後、近くにある浅草寺を散策しました。

外食ではお寿司や豚カツを食べました。ピーターは回転寿司屋のラーメンを気に入った様子でした。豚カツは大皿があっという間になくなりました。自宅では、納豆や梅干しにも挑戦しました（反応はそれぞれでした）。たこ焼きやホットケーキをホットプレートで一緒に作った時は盛り上がりました。

驚いたのは、３日間のホームステイ中に、スターバックスに４回も行ったことです。ポーランドではスターバックスが少ないらしく、２人の希望で歩き疲れた際はスターバックスで休憩しました。日本オリジナルのメニュー「ピーチ　イン　ピーチ　フラペチーノ」をおいしそうに飲んでいました。コーヒーに砂糖を２杯も入れるという甘い物好きでした。

最後は、涙と笑顔でさよならをしました。ポーランドは８年後の世界スカウトジャンボリーの開催地に立候補しています。子供たちはぜひ８年後にポーランドで会おうと約束していました。

彼らの将来の夢は、ピーターは法律家、ルーカスは政治家とのこと。２人とも素直で、これからの活躍が楽しみです。私にとっては息子が増えた気分です。

ホームステイの受け入れ準備などもありましたが、それ以上に、ピーターとルーカスとの交流という素晴らしい経験をさせていただきました。

世界ジャンボリー閉会式

シンボルマーク、Ｔシャツ、ワッペン

世界ジャンボリーの参加にあたって、世田谷・あすなろ地区派遣隊ではシンボルマークを作成しました。シンボルマークは両地区のスカウトから寄せられたデザインをベースに、世田谷地区の力石副長がまとめたものを３種類作り、その中から隊集会でスカウトの投票により選定して、Ｔシャツ、ワッペン、隊旗に使用されました。

練馬・あすなろ派遣隊のシンボルマークについても、同様にスカウトからの応募作で、練馬地区とあすなろ地区のシンボルマークを並べたものです。

世田谷・あすなろ地区派遣隊のシンボルマークを記したＴシャツは、ライム、ピンク、ネイビーの３色を作成し、暑い夏に汗をかいてもサッと乾くドライタイプの素材で、スカウト達はジャンボリーの期間中着用しましたが、ワッペンとともに在庫があります。

ＴシャツはＳ～４Ｌのサイズがあり1枚2,200円、ワッペンは1枚単位で500円、5枚セットで1,500円で、あすなろ地区岡村事務長がとりまとめて販売中ですので、お買い求めください。

解隊式で解散　世田谷・あすなろ地区派遣隊

世田谷・あすなろ地区派遣隊の解隊式が８月３０日（日）、世田谷区立北沢小学校で開催され、世界ジャンボリーで長期間にわたって行動と感動をともにしたメンバーが集まりました。

第一部は北澤八幡神社と代沢小学校で、世界ジャンボリーで使用したテント類の整備を行い、第二部の隊集会では参加スカウト、リーダーが一人ずつ感想を発表しました。第三部は世田谷地区、あすなろ地区の関係者一同で解隊式が行われ、班長・次長、指導者などの解任、派遣団旗、隊旗の返還が行われて、派遣隊は解散することになりました。

ジャンボリー報告会、解隊式　　練馬・あすなろ地区派遣隊

練馬・あすなろ地区派遣隊の報告会・解隊式は８月３０日（日）、練馬区生涯学習センターで開催され、世界ジャンボリーに参加したスカウト、リーダー、地区役員、父兄が集まりました。

報告会では班別に一人ずつ世界ジャンボリーでの感想が発表され、国際感覚を身につけたとの感想や、英会話の能力アップを痛感したなどの話があり、ＩＳＴでの参加者や、ホームステイの家庭からの感想もあり、解隊式をもってジャンボリーで共に感動し、汗を流した仲間たちは解散しました。

ボーイスカウト講習会開催

９月１３日（日）、ボーイスカウト講習会が西荻南区民事務所で開催され、１７名の方が受講されました。

主任講師は庄司昌史日本連盟副リーダートレーナーで、東京連盟開催のボーイスカウト講習会としてはちょうど２００回となります。

参加者は室内での座講のあと、班ごとにパトローリングを作り、班長とともにチェックポイントでの課題を解きながらの班ハイクも体験しました。

ボーイスカウト講習会は、新しく指導者として奉仕される方、スカウトの保護者を始め、地域社会の方々を対象に、体験を通してスカウト運動の概要とスカウト教育の原理など、スカウト運動の良き理解者を増やすために開催するもので、次回のボーイスカウト講習会にも多くの方々の参加をお願いします。

中野サンプラザでチャリティコンサートの奉仕

９月５日（金）、公益財団法人日本チャリティ協会が中野サンプラザホールで開催したチャリティショー「永遠のスクリーンミュージック」に、あすなろ地区の各団がボランティアとして奉仕しました。

この催しは日本チャリティ協会が毎年開催し、東京連盟を通してあすなろ地区に支援の要請があったもので、チャリティショーの収益金は高齢者や障害者の福祉施設に配分されており、ペギー葉山、菅原洋一さんなど、多くの歌手や演奏の方々が趣旨に賛同して出演しています。

各団の参加者はそれぞれ持ち場を担当し、会場の誘導係は会場前の列の整理、入場時の誘導や車イスの方の席への案内、また、会場係は会場内の障害者、高齢者の介助、座席への案内などを行いました。

一日体験、桃井幼稚園で開催　　杉並３団

杉並３団は９月６日（日）、一日体験を桃井幼稚園で開催し、１０組の親子が予約して参加しました。

参加者はビーバー、カブのスカウトの混合チームに親子で入ってもらい、桃井幼稚園の園庭や公園をまわって、工作やゲーム等を体験してもらいました。

子供たちに人気があったのは、ロープと滑車を使って、自分の体を自力で持ち上げるベンチャーコーナーで、モンキーブリッジも人気がありました。

ゲームのあとは、３団恒例の「パックドック」で昼食です。クッキングホイルで包んだホットドックを牛乳パックに入れ、牛乳パックが焼けて出来上がる様子を、参加者は真剣な顔でジーッと見ていました。「パックドック」はおかわり有りで、大満足の様子でした。

何年か前までは、当日参加型の一日体験集会にしていて、参加者数はかなり多かったものの、「ただ遊びに来て、楽しんで帰る」感じで、入隊につながる事が少なくなったため、ここ数年は事前に参加の予約を入れてもらい、スカウト活動に興味を持っている親子のみの参加としており、今回の体験集会の結果が出るのが楽しみです。

ボーイスカウト一日体験　　神明宮で開催　　杉並１２団

杉並１２団は９月２７日（日）、「ボーイスカウト一日体験」を神明宮の境内で開催しました。

集まった子供達はキャンプファイヤーの形になってゲームや歌を歌ったり、スカウトとチームを組んで、境内の各ポイントを回りながらキムスゲームやロープワークなどの課題を楽しみ、ボーイスカウトの活動を体験しました。

また、マーキーテントの中では父兄を集めて、プロジェクターでボーイスカウトの活動内容を放映し、団、育成会の説明のあと、各隊に分かれて隊長から具体的な説明を行いました。

昼食は育成会の保護者の方々が焼き上げたパンに、カレー風味の炒め物を挟んだ料理を提供し、おいしいと好評でした。

ボーイスカウト活動の体験を通じて、多くの子供達の加入が期待されます。

編集後記　今夏の世界ジャンボリーに参加した皆さんや、ホームステイを体験した家庭の皆さんから多くの感想をいただき、ありがとうございました。異なる文化の人々と身近に接して、言葉で意志を十分に伝えることができなくても、気持は通じ合えることを確認した…との感想がありましたが、相互の文化を尊重した人と人との心の結びつきが、世界ジャンボリーのテーマの１つである「平和」につながるものと思います。